



世界を圧倒するラテン・サッカー

ロンドン五輪の男子サッカー決勝戦はラテンアメリカ同士がぶつかった。ブラジルがメキシコに敗れる波乱はあったが、ともあれラテンチームは大活躍した。五輪は23歳以下の若手の戦いで、本当の勝負は2014年W杯（ワールドカップ）ブラジル大会に持ち越された。またもラテンが存在感を示すのだろうか。

一方、欧州ラテンの雄スペイン。ロンドン五輪初戦で日本に負けたとはいえフル代表の世界ランキングはずっと1位を維持している。前回W杯南ア大会で優勝、余勢を駆ってユーロ2012（欧州選手権）も勝った。それだけでも称賛に値するが、サッカー好きたちはスペインの卓越した技術に脱帽した。「ゼロトップ」と呼ばれる超革新技術だ。体操でいえばFを上回るG難度の技だ。

サッカーにはさまざまな陣形（フォーメーション）がある。現代サッカーでは守る側からみて4-4-2（ツー・トップ）や4-2-3-1（ワン・トップ）や4-3-3が主流になっている。監督は相手に合わせて、どういう陣形が最良かを考えて戦う。

グラウンド上の技術開発競争と考えればいい。この競争にとてつもないアイデアを持ち込んだのがスペイン代表だった。サッカーの点取り屋のフォワード（FW）をおかず、3-7-0の「ゼロトップ」で、だれが点取り屋かわからない。全員が変幻自在に動き、相

手を攪乱^{かくらん}し、いつの間にかゴールに迫る。そして、「だれか」が点を取る。目がくらむような風景に相手チームが戸惑ったことは想像にかたくない。

しかしこの陣形は選手の技量が高くないと無理で、下手にやろうとするとポジションが混乱し攻守がバラバラになる。つまりスペインの代表選手はそれをこなすだけのテクニックがあったわけだ。恐らく他国のチームで「ゼロトップ」の陣形をとれるのはブラジルとアルゼンチンぐらいだろう。そんなスペインが今、経済危機で苦しんでいるのは不思議な気がするが、いずれ、国も経済復活の奇策を打ち出すに違いない。

「いったいどっちが強いのか？」——世界のサッカー界はいつも南米と欧州の実力を比べようとする。データでみると、過去19回のW杯優勝国は欧州が10回、南米が9回と2つの地域で分け合っている。それ以外の地域から優勝チームが出たことはない。

1930年のW杯第1回大会以来、最も優勝回数が多いのはブラジルの5回、2番目がイタリアの4回、3番目がドイツの3回。後はアルゼンチンとウルグアイが2回、イングランド、フランス、スペインが1回だ。この結果だけを見ると、中南米と欧州が拮抗しており、どちらが強いかは判断できない。

しかし、別のものさしだと大きな違いが出る。普通はFIFA（国際サッカー連盟）もこんな分け方

はしないが、「ラテン諸国」対「それ以外」を比較してみる。「ラテン諸国」とは欧州ラテン（フランス、イタリア、スペイン、ポルトガルなど）とラテンアメリカ（ブラジル、アルゼンチン、メキシコなど）を合わせたグループ。「それ以外」は英国、ドイツなどだ。すると、W杯優勝国は「ラテン諸国」が15回、「それ以外」はわずか4回で、「ラテン諸国」の圧勝だった。

なぜラテン・サッカーが強いのか。もちろんブラジルやアルゼンチンのように、競技人口が異様に多いこともある。ブラジルでは体が動く限り、だれでもプレーヤーになり得るし、だれもが評論家になり得る。これを三浦カズは「サッカー文化」と呼ぶ。華美で幻想的で独創的なプレーが飛び出すのはブラジル代表が多人種混合だから、という人もいる。

日本の五輪男子チームが3位決定戦で韓国に負けたとき、あるサッカー協会幹部が「きれいなサッカーだけでは勝てない」と辛口コメントを残した。ガンガン当たってくる韓国選手はファウルが多かったが、日本はそれを「いなそうと」して、うまくいかなかった。しかし、スペインやブラジルが同じ状況になったら日本のように技で迎え撃ったと思う。ファウルの少ないラテン流がいちばん強いことは証明済みなのだから。

「リオ+20」からの警鐘

あの時、私はリオデジャネイロにいた。1992年6月3日から14日までの約2週間、地球サミット(国連環境開発会議)のむせ返るような熱気の中にいた。100人近い国家元首が馳せ参じた史上空前の国際会議。「宇宙船地球号」を守ろうという1点において各国の利害が一致した瞬間だった。

あれから20年。2012年6月下旬、同じリオで「国連持続可能な開発会議」(リオ+20)が開催された。地球サミットとは何だったのか。その結果、何がどう変わったのか。

国際会議は国家元首の顔見世興行という意味も大きい。普段、姿を見せたことのない人が素顔で現れる機会はそうあるものではない。国際政治の場で犬猿の仲の人たちも一堂に会する。主義主張、対立を超えて集まることができたのはテーマが「環境」だったからだ。

20年前もそうだった。キューバのカストロ前国家評議会議長とアメリカのブッシュ元大統領(父親)という仇敵同士が同じリオにいた。ブッシュ氏はリオ訪問の途中、かつて軍事侵攻したパナマに立ち寄ったところ激しいブーイングに遭い、リオでの演説も「環境問題に消極的」と批判を浴びた。一方のカストロ氏の演説会場には世界各国の国家元首が「革命家のその後」を見極めようとわんさと集まった。

日本の宮沢首相(当時)は欠席、中村環境庁長官(当時)が演説してお茶を濁した。しかし、ある非

政府組織(NGO)から「ゴールドンベビー賞」なる不名誉な賞を贈られた。「赤ん坊と同じで何もなかった」と。アメリカと同様「消極的」とみなされたのだ。日本人として妙に恥ずかしかったことを覚えている。

これに対し、欧州各国の積極姿勢は際立っていた。本会議議長を務めたトミー・コー氏は「ドイツ、スウェーデン、オランダは積極的かつ建設的な役割を果たした」と称賛した。本会議では「気候変動枠組み条約」「生物多様性条約」「行動計画アジェンダ21」など環境と開発の基本的枠組みの合意が成立した。

当時リオの町のそこかしこに「セントロ・ド・ムンド」というステッカーが張られていた。タクシーにもべたべたついていた。「世界の真ん中」という意味だ。リオが環境保護では世界の中心地になるという意味がこめられていた。20年後に再びリオに中心地が戻ってきたわけで、これで「リオ」は世界の環境問題のシンボルになった。

今回は環境保護と経済成長を両立させる「グリーン経済」がテーマだった。世界191カ国の国・地域から4万人以上が参加したが、先進国の国家元首ではアメリカのオバマ大統領やドイツのメルケル首相も顔を見せなかった。議長国ブラジルが事前に根回しした「成果文書」が修正もなく採択され、シャンシャンで終わった。

20年間で最も変化したのは欧州である。かつて地球サミットの議論をリードした欧州は折からの債務危機の処理に追われ、オランダ仏大統領以外は欠席。BRICS首脳は全員出席したが、先進7カ国(G7)はフランス以外は国家元首を送ってこなかった。

欧州の債務危機が「リオ+20」を台なしにしたともいえるだろう。欧州危機を他人事のように対岸から眺めていると、意外な方向からしっぺ返しを受けることになる。アメリカが地球温暖化対策に不熱心な現状では、欧州が没落し資金が枯渇すると、環境問題の解決が遠のくかもしれない。欧州の復活はそれぞれ地球の課題である。それがわかっただけでも「リオ+20」を開催した意味はあった。

今回日本からは、内政に大忙しの野田首相に代わって玄葉外相がリオに向き、途上国に3年間に1万人の環境専門家を派遣する計画(緑の協力隊)を発表した。

しっかり実を取ったのはアメリカと並んで地球温暖化防止に消極的な中国だった。温家宝首相は国連環境計画(UNEP)に600万ドルを拠出することを表明したが、それが終わるとさっさとアルゼンチン、ウルグアイ、チリに食料調達の旅に出た。こっちの目的のほうが大きかったのかもしれない。(日本ブラジル中央協会 顧問 和田 昌親)

